

児童期と青年期における友人関係研究の概観と展望

著者	松本 恵美
雑誌名	東北大学大学院教育学研究科研究年報
巻	65
号	1
ページ	135-145
発行年	2016-12-26
URL	http://hdl.handle.net/10097/00065108

児童期と青年期における友人関係研究の概観と展望

松本恵美*

本論文では、児童期および青年期における友人関係研究の概観、および今後の研究の展望について論じた。はじめに、これまでの友人関係に関する研究を概観し、友人関係発達の特徴や児童期から形成する仲間集団の特徴について考察した。次に、仲間集団の特徴のひとつである排他性に関する研究の考察を行い、友人関係に関する研究の新たな研究の視点として、排他性のみでなく、受容性を取り入れた研究の必要性について述べ、受容性に関する研究について考察した。そして最後に、排他性と受容性に関する研究における課題や今後の展望について論じた。

キーワード：友人関係, 児童期, 青年期, 排他性, 受容性

はじめに

現在の教育現場はいじめや不登校など、児童・生徒の様々な問題を抱えている。これらの問題の背景の一つとして、対人関係、特に友人関係におけるトラブルが挙げられる。児童・生徒たちにとって、一日の大半を共に過ごす友人や学級集団との関係は快適な学校生活を送る上で重要な位置を占めている。よって、友人や級友との間におけるトラブルを上手く対処できず、良好な友人関係を保つことが出来なくなると、それが原因で仲間外れやいじめに繋がったり、精神的に不安定になり不登校に繋がったりすると考えられる。いじめや不登校といった問題が急増するのは、小学校高学年から中学校にかけての期間であるとされており(有倉, 2011)、とりわけ小・中学生の友人関係を良好に保っていくことが重要な課題であると言える。問題が急増する理由として、子どもたちの友人関係の変容が挙げられる。小学校高学年は、友人関係が大きく変容する時期であると言われており、特徴として少人数で構成される、固定化された仲間集団を形成するようになることが明らかになっている(保坂・岡村, 1986; 三島, 2004; 有倉・乾, 2007)。仲間集団を形成するようになると、児童・生徒は、集団で行動することにより、少人数の仲間と強く結びつき、特定の友人に対する親密性が高まるようになる。しかし一方で、自分が所属する仲間集団以外の他者や異質な特徴を持った他者を寄せ付けないといった、排他性も高まるとされている(三島, 2004)。排他性は、友人関係におけるトラブルの原因の一つであると指摘されてきており、排他性を抑制する要因について検討するこ

*教育学研究科 博士課程後期

とは有意義であると考えられる。

よって、本論文では児童期および青年期の友人関係の発達に関する研究、特に仲間集団にみられる排他性に関わる研究を概観し、研究の課題や今後の方向性について議論することを目的とする。そこで、初めにこれまでの友人関係に関する研究を概観し、友人関係発達の特徴や児童期から形成する仲間集団の特徴について考察する。次に仲間集団を形成することによって高まると言われている排他性に関する研究の考察を行い、友人関係に関する研究の新たな研究の視点として、排他性のみでなく、受容性を取り入れた研究の必要性について述べる。最後に今後の研究の課題や今後の展望について議論する。

1. 友人関係研究の概観

保坂・岡村(1986)は、児童期から青年期にかけての友人関係の発達段階についての仮説を提示し、児童期後半からギャング・グループ、思春期前半にチャム・グループ、思春期後半にピア・グループといった仲間集団が出現することを指摘している。3つの仲間集団はそれぞれ異なる特徴を持っている。ギャング・グループは、保護者から自立するために友人関係を必要とし始める時期に現れる徒党集団であり、同性の同年齢児から構成されている。排他性や閉鎖性が強い仲間集団であり、同一行動による一体感が重視され、同じ遊びを一緒にするものが仲間である考えられる。よって、遊びを共有できないものは仲間から外されてしまう。また、力関係による役割分化が見られ、男子に特徴的にみられる。2つ目のチャム・グループは、互いの共通点や類似点を言葉で確認し合い、自分たちが同質であることを重視する同年齢の同性集団である。ギャング・グループの特徴が同一行動にあるとするならば、このチャム・グループの特徴は同一言語にあるとされ、その集団だけでしか通じない言葉を作り出し、その言葉が通じるものだけが仲間であるとみなされる。個人より集団の意思を尊重し、集団の維持を目的とする仲間集団であり、女子に特徴的にみられる。この語源である Sullivan (1953)のいうチャムは、このようなグループから生まれた特別に親密な友人を指しており、この段階の友人関係はとりわけ重要であるとされている。3つ目のピア・グループは、ギャング・グループやチャム・グループの関係に加えて、互いの違いを認め合い、互いの価値観や理想などを語り合う関係である。よって、共通性や類似性のみでなく、互いの異質性をぶつけ合うことによって、他者との違いを明らかにし、自立した個人として互いを尊重し合うことができる集団である。また、異質性を認めることができる特徴であるため、年齢に幅のある男女混合の集団である。このように、児童期から青年期にかけて友人関係は、同質性を重視する関係から、異質性を認め合う関係へと変化していくと指摘されている。

また、落合・佐藤(1996)の研究においては、中学生・高校生・大学生における友人関係を「友達と選択的に深く関わろうとするか—防衛的に浅く関わろうとするか」という次元と、「人を選択し限定した友達と関わろうとするか」という次元の、2次元から捉え、友人との付き合い方がどのように発達していくかについて検討している。結果として、学校段階が上がるにつれて「自己開示し積極的に相互しようとするつきあい方」増加していく傾向がみられ、逆に、「みんなと同じようにしようと

する付き合い方]、「誰とでも仲良くしていきたいというつきあい方」、友人との間に心理的な距離をおこうとする「自己防衛的なつきあい方」は、学校段階が上がるにつれて減少していく傾向があることが示された。よって、青年期の初めには「浅く広くかわる付き合い方」が多くみられるが、年齢を増すにつれて少なくなること、反対に「深く狭くかわる付き合い方」は年齢を増すにつれて増えていくことが明らかになっている。

榎本(1999)は、外から見える友人関係とその背後にある友人に対していただいている感情の違いに着目し、青年期の友人関係を「活動的側面」と「感情的側面」の2側面から捉え、発達的变化の検討をおこなっている。結果、「活動的側面」のみにおいて発達的变化がみられ、年齢が増すにつれて互いの相違点を認め合い、互いに尊重しあう「相互理解活動」へと変化していくことが明らかになった。また、「相互理解活動」に至るまでの友人関係の変化が性別によって異なることが示され、男子は友人と遊ぶことを中心とした「共有活動」から「相互理解活動」へと変化し、女子は友人との行動や趣味の類似性を重視した「親密確認行動」から他者を入れない固い絆を持つ「閉鎖的活動」へと変化し、その後「相互理解活動」へと変化することが示された。さらに榎本(2000)では、友人との「活動的側面」と友人への「感情的側面」に友人への「欲求の側面」を加えた3側面から友人関係の発達を検討している。結果、「欲求の側面」では、中学、高校、大学のどの学校段階においても、友人と親しい関係を持ちたいという「親和欲求」が高いこと、反対に友人との同じ行動や趣味を望む「同調欲求」はどの学校段階においても低いこと、友人と互いの個性を尊重することを望む「相互尊重欲求」は学校段階とともに高くなっていくことが示された。

石本(2011)の研究では、友人関係のあり方を「友人との心理的距離」、「友人との同調性」、「友人グループの強固性」の3側面から捉え、現代青年における友人関係の発達的变化を検討している。その結果、「友人との心理的距離」については高校生の方が中学生よりも遠いこと、「友人との同調性」は中学生が高校生や専門学生より高いこと、「友人グループの強固性」は学校段階が上がるにつれて低下することが示された。

黒沢・有本・森(2003)の仲間関係の発達段階に関する研究では、仲間関係発達尺度においてギャング・グループとチャム・グループが一つの因子に混在して示され、保坂・岡村(1986)が提示したようなギャング・グループ、チャム・グループ、ピア・グループの3因子には別れないことを指摘していた。これにより、小学生にギャング・グループを形成することなく、チャム・グループを形成したり、ギャング・グループの形成が遅くなり、中学生になってからギャング・グループを形成したりするなど、児童期から青年期にかけての友人関係が必ずしもギャンググループからチャム・グループへと変化するわけではないことが示唆されていた。また、國枝・古橋(2006)の児童期の友人関係の発達を調査した研究においても、保坂・岡村(1986)が提示していたようなギャング・グループはほとんど見られなかったことが指摘されていた。ギャング・グループと確認されなかったグループの特徴として、力関係による役割分化が見られずリーダー的存在がいなかったこと、休み時間や放課後にグループのメンバーと一緒に遊ぶ生徒が少なく同一行動があまり見られなかったことが挙げられていた。

黒沢・有本・森(2003)と國枝・古橋(2006)が指摘している通り、現在の友人関係はギャング・グループ、チャム・グループ、ピア・グループといった明確な3種類の仲間集団を形成しないことが考えられる。しかし、児童期から仲間集団を形成すること、年齢が増すにつれて、同質性や類似性を重視する関係から、互いの異質性を認め合い尊重し合う関係へと変化していくこと友人関係に関する先行研究において一貫した結果として示されており、友人関係の研究を進める上でこれらの仲間集団の特徴の違いを考慮することは重要であることが考えられる。

2. 仲間集団の特徴

前述したように、子どもたちが児童期から明確な仲間集団を形成することは多くの研究で示されている。多くの時間を共有し、多くの活動を共にする仲間集団は児童・生徒にとって重要な存在となる。よって、児童・生徒にとって仲間集団に所属できるかどうかは大きな関心事であり、仲間集団に所属できるかどうか、登校意欲や学校での適応に影響を及ぼし、さまざまな対人関係のトラブルの原因やいじめの原因になることが指摘されている(三島, 2004; 佐藤1995)。

仲間集団の特徴としてや閉鎖性や排他性の高さが挙げられる(三島, 2004; 佐藤1995)。特定の友人との親密度が高まると、一方で、自集団以外の他者や他集団を寄せ付けない強固な排他性を持つようになり、他集団との差を明確にし、自集団の基準に合わない他者や、少しでも異質な部分を感じられる個人を排除するようになる(石田・小島, 2009; 黒沢, 2011)。集団からの排除は、関係性攻撃の一つであり、それが継続すると、子どもは不安や孤独感、憂うつ感などが強くなり深刻なダメージを受けるとされている。(Gazelle & Ladd, 2003; 佐藤ら, 1990)。よって、排他性に着目し、排他性を抑制する要因について検討することは重要であると言える。

佐藤(1995)は、青年期の仲間集団、特に女子が形成する集団において排他的な特徴が顕著にみられることに着目し、高校生の仲間集団への所属理由や高校生が持つ仲間集団志向について検討した。結果、9割以上の生徒が仲間集団に所属していること、高校生女子が仲間集団に所属している理由は「浮いた存在になりたくない」ことと「複数の友人によって支えられていられる」ことの大きく2つにまとめることができること、「浮いた存在になりたくない」という理由は閉鎖的なグループを志向する傾向と関連していることが示された。よって、学校生活において一人になることを避けようとする気持ちを高校生女子が持っていること、また、一人になることを避けようとする生徒は閉鎖的で排他的なグループを求めていることが明らかになった。

石田・小島(2009)の研究においては、男女の両方を対象として、仲間集団の形成動機や仲間集団の特徴や構造について検討している。結果、仲間集団に所属している生徒の割合は男女とも8割を越えていること、仲間集団の特徴として「階層性」、「閉鎖性」、「凝集性」が見られることを示した。また、仲間集団の特徴と仲間集団との関わり方に関しては、仲間集団の閉鎖性は仲間集団への信頼感を低下させ、仲間集団からの拒否不安を高めることが示された。よって、仲間集団の成員が閉鎖的で排他的であるほど所属している個人も集団外の成員との交流が低下することが明らかになった。さらに、仲間集団の特徴において、構成人数と閉鎖性に男女差が見られ、女子の仲間集団は男

子の仲間集団より小さく、閉鎖性が高いことが示された。

石田・丹村(2012)の研究においても、石田・小島(2009)の結果と同様に「階層性」、「閉鎖性」、「凝集性」が仲間集団の特徴として示されている。また、仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連については、男女とも集団の閉鎖性や階層性が高いほど、仲間からの評価を気にし、仲間集団に合わせようとすることが示された。仲間集団の男女差も示され、男子の集団は女子の集団に比べて大きく、階層性が高いこと、一方で女子の集団は男子の集団より閉鎖性が高く男子よりも仲間の評価を気にすることが示されていた。これらの先行研究から、仲間集団の一貫した特徴として、閉鎖性や排他性の高さがあり、特に女子の仲間関係において、排他性が高いことが示されている。よって、次項では排他性に関する研究についてまとめる。

3. 排他性に関する研究

三島(2003)は、排他性とは集団や関係において、「自分の仲間であるどうかによって相手に対する態度を変えたり、自分の仲間と活動することに比べ、仲間以外の児童と活動することを楽しくないと感じたりする程度の強さ」と定義し、排他性を個人レベルと集団レベルの2側面から捉え、個人の排他性と仲間集団の関連について検討を行った。その結果、排他性は、「親和的・独占的かわり」因子と「排除的・固定的かわり」因子に分かれること、女子の方が男子よりも少人数の排他的な集団を作る傾向にあることが示された。また、個人の排他性得点と仲間集団の排他性得点に正の相関が見られ、仲間集団に所属している児童の排他性の高さがその児童が所属している集団の排他性の高さに関連することが示されていた。

有倉・乾(2007)の研究では、排他性を、所属する仲間と一緒にいたいという感情レベルの排他性と、所属する集団の排他的な規範に関する認知の2側面から捉え、小・中学生における排他性の傾向に関する検討がされている。結果、学年差は示されなかったが、男女差は示され、女子の方が男子より所属している集団の排他性が強いこと、女子の方が男子より仲間集団と一緒にいたいという感情レベルの排他性が強いことが示された。

有倉(2011)の研究においても、「排他性欲求」という、仲間と一緒にいたいという感情レベルの側面と、「排他性規範」という、所属する集団の排他的な規範の認知的側面の2側面から排他性の発達的变化が検討されている。結果、中学生の方が高校生より「排他性欲求」が高く、同質性によって仲間集団を構成したいという欲求が強いことが示された。しかし、「排他性規範」は中学生と高校生で違いは見られなかった。また、性差が見られ、女子の方が男子より「排他性欲求」および「排他性規範」が高いことが示された。

排他性の類似概念として「集団透過性」が挙げられる。「集団透過性」とは、仲間でない他者と、集団の境界を越えて相互作用する可能性を示す概念であり、集団成員全体の集団境界の透過可能性を指す「集団透過性」と個人が集団境界を越えられる可能性を指す「個人の集団透過性」に分けられる。黒川ら(2006)は、「集団透過性」と「個人の集団透過性」の関連について検討しており、「個人の集団透過性」は「集団透過性」から影響を受けていることが示された。また、女子において、仲間からの

制裁の予測認知が「個人の集団透過性」を低めることが示された。よって、女子児童は仲間からの制裁を予測することで、不安を喚起させ、仲間集団以外の他者とのかかわりを持たないようにすることが示唆された。

また、黒川・吉田(2009)の研究では、小学校高学年を対象に、「個人の集団透過性」が授業の班活動に与える効果について検討し、「個人の集団透過性」が高い児童の方が低い児童よりも、明るく優しい雰囲気のもとで学習活動を行っており、班成員から受けるサポートが多いことが示された。よって、排他性の高さが授業への集中や意欲的な態度に負の影響を与えることが示された。

また、長谷川(2014)は、小学生、中学生、大学生を対象として、異質な他者を集団から排除する判断の発達について検討し、年齢によってどのような理由で集団排除を正当化するのかについての調査を行った。結果として、年齢と共に排除する他者の特徴を考慮するようになること、年齢と共に他者の特徴の変容を求めなくなる傾向があることが示された。よって、年齢によって排除判断に利用する情報が異なることが示された。

4. 友人関係研究における新たなアプローチ：排他性と受容性

前述したとおり、友人関係に関する先行研究、特に仲間集団に関する研究では、学校現場におけるトラブルの原因の一つである排他性に着目しているものが多く見られる。排他性に着目し排他性を抑制する要因について検討することは有意義であると言える。しかし、他者を仲間集団から排除しようとする排他性のみではなく、自集団以外の他者や自分と異なる特徴を持つ他者であっても受け入れようとする「受容性」に着目することも、友人関係における問題を解決する上で重要であると言える。受容性は、排他性が高ければ低くなり、排他性が低ければ高くなるという様な、一次元の両極の関係であると考えられやすい。しかし、排他性の先行研究においても(有倉・乾, 2007; 有倉, 2011)、受容性の先行研究においても(松本, 2014; 2015)、男子より女子の方が受容性・排他性が共に高いということが示されている。そのため排他性も受容性も高い生徒がいることが考えられる。よって、排他性と受容性をそれぞれ独立した要因として捉え、「排他性」と「受容性」の両方を取り入れた研究をすることは、児童期および青年期の友人関係の研究において必要であると考えられる。

5. 受容性に関する研究

Killen & Stangor (2001)は集団からの排除と受け入れの判断の発達の变化を検討し、発達とともにどのような特徴を持った他者を自集団から排除または自集団へ受け入れるのかについて検討を行った。結果、児童・生徒は道徳的に正しいどうか、社会的慣習に沿っているかどうかといった2つの基準に基づいて判断を決定していることが示された。また、年齢が増すにつれて、仲間集団が上手く機能するために他者を自集団から排除するようになることが示された。

Killen et al. (2001)の研究では、集団からの排除と受け入れの判断基準として相手の人種や性別といった社会的カテゴリーを取り上げて検討し、児童、生徒どちらにおいても相手の人種や性別を理由に集団から排除することは悪いことであると認識していることが示された。

一方渡辺ら(2001)は、仲間集団への「受け入れ」とそこからの「排除」を決定する基準として社会的カテゴリーではなく、個人レベルの特徴を取り上げて研究を行った。個人レベルの特徴として、否定的特徴を6つ(暴力をふるう、緑の髪、調子者、異性のようにふるまう、運動が苦手、性格が暗い)取り上げ、自集団への受け入れの難易について検討した。結果として、全体的に暴力的な特徴や特異な外見の子どもへの受け入れが困難であり、性格が暗いことや異性のように振る舞うといった特徴を持った子どもへの受容が容易であることが示された。これにより、暴力的といった道徳的に悪いと考えられる特徴や、外見が特異といった社会的慣習に沿わない特徴をもつ他者への受容が困難であることが明らかとなった。また、渡辺ら(2001)は日本の学生と米国の学生を対象としており、文化によって受け入れやすい特徴が異なりことが示されていた。

また、武ら(2003)は渡辺ら(2001)と同様の6つの否定的であると考えられる特徴をとりあげ、日本と中国における小学生・中学生・高校生を対象として、受け入れと排除の判断基準について検討を行った。結果、異性のようにふるまうという特徴や運動が苦手といった特徴については学年とともに寛容になっていくが、暴力をふるうという特徴に対しては学年とともに不寛容になることが示された。これにより、学年があがるとすべての特徴に対して受容的になっていくのではなく、相手の特徴によって相手を受け入れられるようになりかどうかが大きく異なることが明らかになった。

このように先行研究では主に、仲間集団への「受け入れ」や「排除」を決定する基準について検討がなされており、他者が持つ特徴によって自集団への「受け入れ」判断の難易が異なること、年齢と共にすべての特徴をもつ他者に対して受容的になるのではなく、特徴によって寛容になっていく特徴と、逆に不寛容になっていく特徴があることなどが明らかとなっている。しかし、これらの先行研究では、「受け入れ」や「排除」の判断基準について検討されているものの、自集団以外の他者や異質的な特徴を持っている他者であっても受け入れようとする個人の性質である「受容性」に着目し、その性質を高める要因について検討は行われてきていない。

そこで松本(2014)では、「受容性」に焦点をあて、「受容性」の規定要因について検討を行った。受容性を高める要因として「個人の性格特性」、「個人が所属している仲間集団の排他性」、「様々な特徴をもつ相手との関わりの経験」の3要因を取り上げ小学校の4年生と6年生を対象に検討を行った。結果、「個人の性格特性」、「個人が所属している仲間集団の排他性」、「様々な特徴をもつ相手との関わりの経験」の3要因すべてが受容性に影響を与えていることが示された。しかし、課題として使用した尺度の信頼性が低かったこと、受容性と排他性の関係性が明らかにならなかったこと、受容性の発達的变化が明らかにならなかったことなどが残された。

これを受け、松本(2015)では、対象に中学生を加え、小学5年生と中学2年生を対象として受容性の規定要因に関する研究を行った。受容性の規定要因として「他者との関わりの経験」、性格特性の代わりに「幅広い関心」と「幅広い知識」を取り上げ、検討を行った。また、松本(2015)では、「受容性」を仲間集団におけるものに限定せず、一般他者すべてに対しての「受容性」を取り上げ、排他性に関してのみ、友人関係に限定した「友人関係における排他性」として取り上げた。また、受容性と排他性の関係についての検討も行った。結果、多様な他者と関わったことがある児童・生徒の方

が経験が少ない児童・生徒より受容性が高いこと、興味・関心の幅が広い児童・生徒の方が狭い児童・生徒より受容性が高いことが示された。「幅広い知識」に関しては、幅広い知識を保持している児童・生徒の方が狭い児童・生徒より受容性が高い傾向が示された。また、受容性と排他性は中程度の負の相関関係が示され、ある程度関連はしているが単純な両極の関係ではないことが示唆された。

以上より、受容性には「他者との関わりの経験」、「幅広い関心」、「幅広い知識」が影響しており、児童期・青年期における受容性を高めるには、様々な特徴をもつ他者と関わる機会を与えたり、興味・関心が広がるような働きかけをしたりすることが重要であることが示唆された。しかし、受容性の発達的变化や受容性と排他性を含めた要因間の関係性が明らかになっておらず、さらなる研究であると考えられる。また、有倉(2011)や黒川ら(2006)の研究において、個人レベルの排他性と、個人が所属している仲間集団の排他性の2側面から研究がなされていることから、今後の研究において、仲間集団の排他性の影響を要因として取り入れる必要性があると推測される。黒川ら(2006)の研究において、仲間集団の排他性が個人の排他性に影響を与えていることが示されていることから、今後の研究において仲間集団の排他性は個人の排他性を強める要因として取り入れるべきであろう。松本(2015)において受容性と排他性の関係が中程度の負の相関にとどまっていたが、これは、排他性が個人の一般他者に対する受容性と仲間集団の排他性の両方から影響を受けていたためと推測できる。よって、今後の課題として、受容性、個人の排他性、他者との関わり経験、興味・関心に加えて、個人が所属している仲間集団の排他性を加えた要因間の関係性を調べる必要があると考える。

6. 課題と展望

本論文では、児童期および青年期における友人関係研究の概観を通し、友人関係の研究において排他性と受容性の両方を取り入れた研究を行う必要性について議論し、今後、排他性と受容性に関してどのような研究を行うべきかについて考察した。児童は、小学生高学年になると、固定化された仲間集団を形成すると言われており、児童期および初期青年期の仲間集団の特徴として同一性や類似性を重視する排他性の高い集団であることが指摘されている。排他性が高い児童・生徒は、自集団以外の他者や異質な特徴を持つ他者を排除する傾向が強く、いじめや仲間はずれといった友人関係におけるトラブルを引き起こしやすいと言われており、排他性に関する研究が多くなされてきた。しかし、友人関係におけるトラブルを解決する上で、自集団以外の他者や異質な特徴を持つ他者を受け入れる「受容性」に着目することも重要であると考えられる。これまでの先行研究では、受容性の規定要因および受容性と排他性の中程度の正の相関関係が明らかになっているが、受容性と排他性の関係性は明確になっておらず、受容性が排他性に直接的に影響を与えているのか、間接的に影響を与えているのかという疑問が課題として残されている。またこれまでの研究において「個人の受容性」、「個人の排他性」、「仲間集団の排他性」の3要因を取り上げ、関係性を明らかにした研究は行われていないため、今後、「個人の受容性」、「個人の排他性」、「仲間集団の排他性」およびこれらの規定要因を含めた要因間の関係性の検討が必要であると考えられる。さらに、受容性に関す

る発達的特徴が明らかにされていないため、受容性が年齢と共にどのように変化していくのか、受容性と排他性の関係性は年齢と共にどのように変化していくのか、年齢による友人関係の特徴や仲間集団の排他性の違いがどのような影響を与えているのかについて検討することも今後の研究において重要になると考えられる。

【文献】

- 榎本淳子. (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化. 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本淳子. (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連. 教育心理学研究, 48, 444-453.
- Gazelle, H., & Ladd, G. W. (2003). Anxious solitude and peer exclusion: A diathesis-stress model of internalizing trajectories in childhood. *Child Development*, 74, 257-278.
- 長谷川真理. (2014). 他者の多様性への寛容: 児童と青年における集団からの排除についての判断. 教育心理学研究, 62, 13-23.
- 保坂亨・岡村達也. (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討. 心理臨床学研究, 4, 15-26.
- 保坂亨. (2010). いま, 思春期を問い直す: グレーゾーンに立つ子どもたち. 東京: 東京出版会.
- 石本雄真. (2011). 現代青年における友人関係の特徴と心理的適応との関連. 発達研究, 25, 13-24.
- 石田靖彦・小島文(2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連: 仲間集団の形成・所属動機という観点から. 愛知教育大学研究報告教育科学, 編58, 107-113.
- 石田靖彦・丹村明寿香. (2012). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりが学校における規範意識と逸脱行為に及ぼす影響. 学校教育講座(心理学), 61, 117-125.
- Killen, M. & Stangor, C. (2001). Children's social reasoning about inclusion and exclusion in gender and race peer group contexts. *Child Development*, 72(1), 174-186.
- Killen, M. & Pisacane, K. & Lee-Kim, J. & Ardila-Rey, A. (2001). Fairness or stereotypes? Young children's priorities when evaluating group exclusion and inclusion. *Developmental Psychology*, 37(5), 587-596.
- 國枝幹子・古橋啓介. (2006). 児童期における友人関係の発達. 福岡県立大学人間社会学部紀要, (15), 105-118.
- 黒沢幸子・有本和晃・森俊夫. (2003). 仲間関係発達尺度の開発: ギャング, チャム, ピア・グループの概念にそって. 目白大学人間社会学部紀要, 3, 21-33.
- 黒沢幸子. (2011). 思春期臨床と親支援: 同質と異質のはざま. 臨床心理学, 11(4), 604-611
- 黒川雅幸・三島浩路・吉田俊和. (2006). 仲間集団から内在化される集団境界の評定. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程紀要, 53, 21-28.
- 黒川雅幸・吉田俊和. (2009). 仲間の存在と個人の集団透過性が学習班活動に及ぼす効果. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 49, 45-57.
- 松本恵美. (2014). 児童期の友人関係に関する研究: 個人の受容性に着目して. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 43, 131-140.
- 松本恵美. (2015). 児童期と青年期における対人受容性に関する研究. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 64, 105-116.
- McGlothlin, H. & Killen, M. (2010). How Social experience is related to children's intergroup attitudes. *European*

Journal of Social Psychology, 40, 625-634.

三島浩路. (2003). 小学校高学年のインフォーマル集団の排他性に関する研究. 生徒指導研究, 15, 51-56.

三島浩路. (2004). 友人関係における親密性と排他性: 排他性に関する問題を中心にして. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 51, 223-231

落合良行・佐藤有耕. (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化. 教育心理学研究, 44(1), 55-65.

佐藤有耕. (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析. 神戸大学発達科学部研究紀要, 3(1), 11-20.

佐藤容子・佐藤正二・高山巖. (1990). 仲間関係に問題をもつ子ども: 自己知覚測度による分析. 宮崎大学教育学部紀要教育科学, 68, 9-18.

Sullivan, H. S. (1953). The interpersonal theory of psychiatry. 中井久夫他訳, 精神医学は対人関係論である. みすず書房.

武勤・渡辺弘純・Crystal, D. S.・Killen, M. (2003). 人間の多様性への寛容: 児童生徒の仲間集団への「受け入れ」に関する中日比較研究. 愛媛大学教育学部紀要, 50, 25-41.

渡辺弘純・Crystal, D. S.・Killen, M. (2001). 人間の異質性への寛容: 児童生徒の集団への「受け入れ」の発達に関する日米比較研究. 愛媛大学教育学部紀要, 47, 39-58.

有倉巳幸・乾丈太. (2007). 児童・生徒の友人関係の排他性に関する研究. 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 58, 101-107.

有倉巳幸. (2011). 生徒の仲間集団の排他性に関する研究. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 21, 161-172.

Development of Peer Relationship in Children and Adolescent : A Review and Perspective

Emi MATSUMOTO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

In this paper, I reviewed the development of peer relationship in children and adolescent, and discussed the perspective of future research. First, I reviewed the characteristics of peer relationships and peer group in children and adolescent from previous studies. Next, I reviewed the intergroup exclusiveness and acceptability, then I discussed why it is important to study about exclusiveness and acceptability in peer relationship. In conclusion, I suggested some direction of the further research in this area.

Key words : peer relationship, children, adolescent, exclusiveness, acceptability.

